

松永種苗株式会社

江南駅のすぐ近くに野菜の種や苗、園芸資材などを販売している「松永種苗」がある。実はココ、単なる小売店ではなく、オリジナル品種の開発を手掛けている会社である。次々と新品种が誕生する昨今、何にこだわりどんな研究を重ねているのか、話を聞いた。

品種開発で農業界を変える

江南市古知野町にある松永種苗株式会社は明治16年（1883年）に創業。桑の木や杉・松といった山林苗の卸業としてスタートした。しかし、この地域では温暖な気候と木曾川の恵みを受けた肥沃な土壌が広がっていることもあり、野菜の栽培だけでなく、採種が盛んな地域だったことから、種苗業にも着手。さらに野菜のオリジナル品種の開発を目指し、1962年に研究農場を開設した。以来、松永種苗は農園芸の発展に力を注いでいる。



▲加工用トマトとして開発。茎を地面を這わせて栽培



▲松永社長

▲開発担当 赤堀さん

松永種苗第1号「早生だるま」



1968年、松永種苗第1号となるオリジナル品種が誕生した。加工用トマトの代表品種となった「早生だるま」である。実は、このトマトは大手食品メーカーからの依頼により共同開発されたもの。生食用のトマトに比べ、果実の中で真っ赤なものが特徴だが、栽培方法も大きく異なる。通常は支柱で茎を支えながら、土上へと伸びるように育てるが、加工用トマトは支柱を使わず、地面を這わせるように育てるのだ。これにより多くの日差しを浴び、一斉に大量のトマトの収穫が可能となった。そして1969年には絹サヤエンドウ「白姫」を発表する。通常、絹サヤエンドウは秋に種を蒔き、翌年の春に収穫となるが、夏に種を蒔き、年内に収穫ができるようになった。

さらに1975年には全国的なヒットを誇る「F1総太り大根 宮重1号」を発表した。これは青首大根のルーツといえる地場野菜・宮重大根を品種改良したもので、「F1」とは一代交配種という意味。異なる形質をもつ品種を掛け合わせると、その第二代（F1）には、優性だけが現れるというメンデルの第一法則を利用したもので、栽培しやす



▲だいごんの種を栽培中

すく、生育が早い、形が揃い、味も良い大根が誕生した。これらの品種により、それまで主流だった白首大根が姿を消し、現在は全国的に青首大根が市場に出回っている。

品種開発完了まで最低10年

研究農場開設以来、松永種苗が取り組んできた品種開発は約300種以上にものぼる。収穫が不可能とされた時期に収穫できるものや、これまでに存在しなかった色や形状のものを作り出すなど、常に新たなチャレンジを重ねてきた。しかし、ここに至るまで簡単な道のりではなかった。研究を始めてから結果が出るまで最低でも10年はかかるからだ。品種開発は目指す性質に適合しそうな遺伝子をもつ素材を選び、交配を重ねていく作業となる。種が採れるのに1年で1サイクルとなり、それを5〜6年続けた頃から、いくつか組み合わせを作り、最も優れた性質のものとはどれなのか、現存する品種と比べ優っているのか、または変わった特性はあるのかをチェック。これらを繰り返し、純度を上げ、完成に至るまでさらに7〜8年かかる

という。

そこから、広大な海外の圃場で採りのための栽培をし、品種名を付けるところまでを含めると、通常なら15年以上かかってしまう。しかし、松永種苗には60年間という長きに渡り、育種や研究開発に取り組んできたため、多くの遺伝子資源を保持していることから、10年ほどで完成を目指すことができるのだ。

時代を先読みした品種開発

10年先に世の中がどんな状況で、どんなものが人々の興味を引くのかは誰もわからないはずだ。だからこそ、品種開発に最低10年を要するという種苗会社にとっては、10年先の变化と人々のニーズを読み取ることが求められる。松永種苗でその役割

を担うのは全国をカバリーしている営業陣だ。農家がどんなことに困り、何を求めているのかを常にリサーチし、研究開発部へフィードバックしたことを元に、研究者たちはさらに自由な発想を加えながら、開発に取り組んでいく。

また、品種開発は、目指した性質をもった品種が誕生しただけでは終わりではない。品質を安定させ、大量生産できることが必要となる。そ

のため松永種苗では、原種の維持管理を徹底させながら、海外で種を増産している。自然が相手となるため、気候に左右されるものもあるが、厳守すべき特性があるものだけを選別し守り続けている。

こうして生産された種は国内の種苗会社を経由し、小売店で販売されることとなる。日本で作りだしたもので、同じ緯度で気候が似ている地域ならば海外でも栽培は可能で、韓国や中国、欧州などへも販売しているという。

誰も発想しない、新しい野菜を誕生させたい

現在、1ヘクタールの研究農場では大根やタマネギ、エンドウ、ミニトマト、シソを中心にオリジナル品種開発に向けて取り組んでいる。

国内に約50社の種苗メーカーがあるなかで、松永種苗の強みをたずねると「全国をカバーする営業力と、珍しい品種をもっていること、そしてコンスタントに新品种を発表していること」と即答した5代目の松永真一郎社長。それを裏付けるかのようになり、業界を唸らせ、ロングセラーとなっているオリジナルブランドが

大根「紅くるり」とミニトマト「まゆか」、F1極早生タマネギ「ハイパーニア」である。「紅くるり」は2006年に発表された赤い大根で、サツマイモのようなふつくらした形状が特徴だが、もつとスゴいのは中の果肉まで赤いというところだ。赤い大根は存在しているものの、二十日大根のように皮は赤いが果肉は白かったり、紅芯大根のように皮は白く果肉が赤い大根は存在していたが、皮も果肉も真っ赤な大根を誕生させたのは世界初なのだ。そのうえ、従来の大根と同じ食味を継承しており、サラダにすると彩りが増すうえ美味いいため、需要が広がっている。

ミニトマト「まゆか」は2013年に発表されたもの。とことん美味しさだけを追求しており、甘味と酸味のバランスが絶妙なため、こだわりの野菜を作る農家によく栽培されている。

そして2020年にはF1極早生タマネギ「ハイパーニア」を発表した。5月以降に収穫できる貯蔵用タマネギはほとんどがF1品種であるが、ハイパーニアはF1種では日本一早い4月上旬の収穫が可能となった。

ちなみに現在、発売の準備を進めているのは、これまた日本初となる紫色のスナップエンドウ「パープルスナップ」だ。すでに紫色の「ツタンカーメンのエンドウ」は存在するが、サヤを食べることはできない。そこで、「サヤごと食べられるスナップエンドウにこのツタン

松永種苗

オリジナル品種



紅くるり

世界初皮も果肉も真っ赤な大根



ハイパーニア

一番早く収穫可能なF1玉ねぎ



パープルスナップ 藤姫

来年発売予定の新品種



白姫

年内収穫できる絹莢豌豆

アンテナショップ

種や苗、園芸用品を販売するアンテナショップです。自社品種以外の種や苗も販売しています。



松永種苗株式会社

Instagram

江南市古知野町瑞穂3番地
電話 0587-54-5151
営業時間 8:30~17:30

